＜様式１＞

令和７年度　江東区立亀高小学校　自己評価表

校長名　　吉田　松寿

目標に向けた取組についての自己評価

重点領域１	確かな学力の向上　～思考力・判断力・表現力の育成～

項目	努力指標（教師側）	達成度	成果指標（こども側）	達成度	評語
1	○校内研究を国語科とし、講師を招聘しての講演会２回と年間６本の授業研究を実施する。表現活動を意識した言語感覚を養うことついて研究し、「思考力・判断力・表現力」を育む指導の工夫をする。	100%	○9割以上の児童が、学校評価アンケートの「思考力・判断力・表現力」係る項目で肯定的回答をする。（７５．９%）	84.3%	B
2	○朝学タイムや家庭学習において「東京ベーシックドリル」に継続的に取り組ませ、診断テストを５・７・１２月に行い、基礎的基本的な知識及び技能の着実な習得を図る。	100%	○８割以上の児童が、「東京ベーシックドリル」の問題を８割以上正解する。（69.6%）	87.0%	B
3	○学校と家庭で日常的に ICT を活用させ、児童の情報活用能力を向上させる。	100%	○9割以上の児童が、学校評価アンケートにおける「情報活用能力」に係る項目で肯定的回答をする。（９５．３%）	100%	A
4	○「家庭スタンダード」を設定し、全学年で共通理解のもと、家庭との連携を図り、目標時間の家庭学習を定着させる。	100%	○９割以上の児童が学校評価アンケート「家庭学習」に係る項目で肯定的回答をする。（８４.１%）	93.4%	A

＜結果についての分析と改善策＞

①国語科の授業研究を６本実施した。指導案検討会で学ぶ教員が増え、授業改善への意識の高まりが感じられた。児童アンケートの「思考力・判断力・表現力」に係る項目の肯定的評価の割合は、７５．９%であり、昨年度を３．７ポイント下回り、達成度は８４．３%であった。今年度から国語科の研究になり、言語活動の発表という意識が低かった感は否めない。次年度は「思考力・判断力・表現力」が高まるように国語科の「書くこと」で表現力向上に向けて授業改善を図っていく。

②「東京ベーシックドリル」の診断テストを５・７・１２月に行った。２月実施の診断テストでは、８割以上正解した児童が 69.6%であり、達成度は 87.0%であった。昨年度２月実施の診断テストで８割以上正解した児童は全体の 67.3%、達成度は 84.2%であり、今年度は、８ 割以上正解した児童の割合が 2.3%上回り、達成度は 2.8%上回っていた。朝学タイム等において、ベーシックドリルに取り組んできた成果と言える。また、テスト後に学年毎の成果と課題を分析し改善策を共通理解し、組織的に取り組んだことにより成果があったと考える。授業改善を試み、「東京ベーシックドリル」の継続的な取組を通して、基礎的基本的な知識及び技能の習得を図っていく。

③「情報活用能力」に係る項目の肯定的評価の割合は９５.３%であり、昨年度より２ポイント上回った。また、達成度は 100%であった。中・高学年においては、調べ学習や情報共有、ドリル学習、プレゼン等が日常的に行われている。また、教科別の情報端末の活用例として、音楽科では楽器や歌唱の練習用動画の活用、図工科では児童がつくった作品や感想等の共有等があげられる。引き続き、情報端末を有効に使った実践を積み重ね、児童の情報活用能力を高めていく。

④児童アンケートの「時間を決めて、家庭学習に取り組んでいる」の肯定的評価の割合は ８４.１%であり、昨年度より１．９%下回った。また、達成度は９３.４%であった。全校で「家庭学習カード」活用した家庭学習を行っており、家庭学習が定着してきている児童が一定数いると考えられる。しかし、保護者アンケートにおいても、「家庭学習スタンダードに基づき、児童の学習習慣の定着に向けて努力している」の項目における肯定的評価が８９%となり、昨年度より４．２%下回っている。家庭学習カードの活用については教職員の反省でも活用について改善に向けての意見が出ている。児童や保護者が納得し、前向きに取り組める家庭学習の在り方を検討していく。

＜様式１＞

重点領域２	豊かな心の育成　　～感性豊かであたたかい心の育成～				
項目	努力指標（教師側）	達成度	成果指標（こども側）	達成度	評語
1	○「いじめに関する授業」を各学級年間３回、全校での「いじめの標語づくり」年間１回行い、児童のいじめに関する意識の向上を図る。保護者に対して、迅速かつ丁寧な説明を行う。	100%	○9割以上の児童が、学校評価アンケート「友達とのかかわり」の項目で肯定的回答をする。（95.3%）	100%	A
2	○全全校児童における「百人一首大会」、外部講師による「俳句教室」を実施し、豊かな心を育む。	100%	○9割以上の児童が学校評価アンケートで、「百人一首」に係る項目で肯定的回答をする。（６６.３%）	73.6%	B
3	○特別の教科道徳等において、情報モラルに関する授業を各学級年間２回、朝学習における情報モラル学習を年間２回実施し児童の意識を向上させる。	100%	○9割以上の児童が学校評価の「情報モラル」に係る項目で肯定的評価をする。（91.3%）	100%	A

＜結果についての分析と改善策＞

①計画通り、「いじめに関する授業」「いじめに関する標語づくり」「児童主体のいじめに関する取組」を実施した。児童アンケート「友達とのかかわり」の項目における肯定的評価の割合は９５.3%であり、昨年度を 2%上回った。達成度は 100%である。さらに、こどもたち同士のよりよい関係を構築できるように指導をしていく。

②「百人一首大会」「外部講師による俳句教室」を実施した。児童アンケートの「百人一首」の項目で肯定的な回答をした児童は全体の６６．３%で、昨年度より１０．９%下回った。また、達成度は７３.６%であった。「百人一首」の活動について、アンケート実施後に活動が活発化していくことで、取り組みを行っていない活動を質問されたことで児童の肯定的評価が下がったと考えられる。また、詩の暗唱を今年度は実施していないことから、昨年度のアンケート項目との意識の差もあらわれたと考える。国語的な行事や活動についての効果的な年間指導計画について検討する必要がある。

③「情報モラル」に関する道徳の授業を各学級２回行った。その他、「情報モラル」に関する授業を各クラス２回、情報モラル教育に関する全校集会を２回行った。「道徳授業地区公開講座」では、全学級が「情報モラル」に関する授業公開を行い、講師の先生には、「スマホや PC、インターネットに潜む危険」としてご講演をいただいた。全校で年間を通して「情報モラル教育」に取り組んだ結果、児童アンケートの「情報モラル」に関する肯定的評価は、91.3%であり、達成度は１００%であった。また、保護者アンケートの「情報モラル」の項目における肯定的評価も 92.3%であった。昨年度に引き続き、児童・保護者・教職員の情報モラルの意識を高めることができたと感じている。来年度以降も教育課程に位置付け、「情報モラル教育」を推進していく。

重点領域３	健やかな体の育成　　～運動能力・体力の向上～				
項目	努力指標（教師側）	達成度	成果指標（こども側）	達成度	評語
1	○保護者と連携した「セレクトメディアチャレンジ」を毎月実施し、児童が自分自身でメディアの活用について考えられるよう指導する。	100%	○9割以上の児童が、アンケート「メディアとのかかわり方」に係る項目で肯定的回答をする。（80.3%）	89.2%	B
2	○持久走旬間、なわとび旬間を設定し、児童が運動に慣れ親しむようにする。	100%	○９割以上の児童が、学校評価アンケート「持久走・なわとび」に係る項目で肯定的回答をする。（91.6%）	100%	A
3	○オリンピック･パラリンピック教育の継続として、全児童が年間１回以上「ボッチャ」に取り組み、「ボッチャ」に親しむ。	100%	○９割以上の児童が学校評価アンケートで「オリンピック・パラリンピック教育」に係わる項目で肯定的回答をする。（76.9%）	85.4%	B

＜様式１＞

＜結果についての分析と改善策＞

①昨年度、「セレクトメディアチャレンジ」と名称を改め、児童が自分自身でメディアの活用について考えられるように改善した。児童アンケート「メディアとのかかわり方」の肯定的評価は 80.8%であり、達成度は、89.2%であった。今年度は「情報モラル教育」に全校で取り組んだことにより、より児童の情報活用の実態を把握することができた。学校側が想像している以上に、児童は長時間メディアとかかわっていることが分かり、健康被害、ネット依存等の問題が潜んでいるのではないかと危惧している。一人ひとりの児童が自分自身でメディアの活用についてどのようにするか、より真剣に考えることができるよう、指導の充実を図っていきたい。また、低・中・高学年での肯定的評価を比較すると、低学年が 72.5%と一番低くなっている。さらに、家庭との連携を図っていく。

②持久走旬間となわとび旬間を実施し、全校で取り組むことができた。児童アンケートの「持久走・なわとび」に係る項目での肯定的評価の割合は 91.6%であり、昨年度より 0.8 ポイント上回り、達成度は 100%であった。また、保護者アンケートにおいても「健康増進につながる授業や持久走週間、持久走時記録会、ながなわチャレンジ週間等の活動により、体力向上を図っている」の項目における肯定的評価は 99.5%と 100%に近い数値であった。さらに児童が運動に慣れ親しむことができるよう、次年度以降も工夫していく。

③オリンピック・パラリンピック教育の継続として、今年度より４年生の総合的な学習の時間に「ボッチャ」を位置付けた。そのため、指導時間や指導体制に無理がなく、持続可能な活動となった。「ボッチャ」に取り組むようにした。児童アンケートの「ボッチャ」に係る項目の肯定的評価の割合は 76.9%であり、昨年度 18.3%下回り、達成度は 85.4.%であった。１，２年生に対して実施していないことで肯定的評価が大幅に下がったと考えられる。次年度は評価項目を変更する。

重点領域４	特色のある教育活動の充実				
項目	**努力指標（教師側）**	達成度	**成果指標（こども側）**	達成度	評語
1	○地域学校協働本部等と連携し、２年生「カブトムシふれあい学習」1 回、３年生「ヤゴレスキュー・トンボ(幼虫)の飼育」、1～4 年生「みどりの教室」４回、５年生「田んぼの学校」４回、３・４年生「森の清掃活動」各学年１回を実施し、わんぱくの森の自然や生き物に親しむ。	100%	○9 割以上の児童が学校評価アンケート「わんぱくの森」に係る項目で肯定的回答をする。（90.0%）	100%	A

＜結果についての分析と改善策＞

①地域学校協働本部等と連携し、計画した全ての学習を展開することができた。児童アンケートの「わんぱくの森」に関する項目での肯定的評価の割合は 90.0%であり、昨年度より 5.5 ポイント下回ったものの、達成度は 100%となった。現在は、「わんぱくの森」の学習内容を教員やNPO 法人の方が検討し計画的に実践している。今年については、「わんぱくの森」も展覧会の会場とし作品を展示した。引き続き、「わんぱくの森」を本校の優れた教育資源として活用し、児童の主体的・探究的な学習にも結び付けていく。

【評語】成果指標（こども側）の達成度*に応じて決定する。
Ａ：９０％以上（目標達成とみなし、次年度は新たな目標を設定する）
Ｂ：５０％以上９０％未満
Ｃ：５０％未満（目標や努力指標等を見直す）
＊達成度（％）　＝　指標　÷　目標　×　１００